

日本国内で再発見されたハダニクロヒメテントウのキアシクロヒメテントウからの識別法および両種の発生状況

○岸本英成・望月雅俊（果樹研）・北野峻伸（愛媛大農）

ダニヒメテントウ属のハダニクロヒメテントウ *Stethorus pusillus* (Herbst)は、北米大陸、ユーラシア大陸、およびアフリカ大陸と世界的に広く生息する種で、難防除害虫ハダニ類の有力天敵として知られている。本種は1900年代初頭に本州での生息が報告されたが、その後本州～九州の農生態系で発生するダニヒメテントウ属はキアシクロヒメテントウ *Stethorus japonicus* H. Kamiya とされた。そのため、本種は日本国内には生息しないと考えられてきた。しかし、果樹園および周辺植生に発生するダニヒメテントウ属を精査したところ、ハダニクロヒメテントウの発生があらためて確認された。そこで、各発育ステージでの両種の識別点を明らかにする（岸本ら，2013）とともに、果樹および周辺植生から採集した両種の生息状況を調べた。

これまで報告されている両種の識別点は雄交尾器の形態の違いであったが、それに加えて、両種は成虫の頭部色彩にも差異が観察された。すなわち、ハダニクロヒメテントウの頭部は雄雌ともに全体的に黒色であったが、キアシクロヒメテントウの頭部は、雄雌で範囲は異なるものの、黄色～黄褐色の部分が存在した。また、両種は各発育ステージの外部形態でも識別可能であった。卵では、ハダニクロヒメテントウが黄白色～乳白色であったのに対し、キアシクロヒメテントウでは紅～紅白色であった。幼虫では4齢（終齢）の前胸部背面の形態に違いがあり、ハダニクロヒメテントウには1対の黒紋が存在するのに対し、キアシクロヒメテントウには黒色の点刻模様のみが存在した（図）。蛹では、ハダニクロヒメテントウが全体的に光沢のある黒色であったのに対し、キアシクロヒメテントウはやや光沢のない黒色で、後胸部背面中央に三角形の白～淡褐色紋および腹部第1節背面の左右側方に1対の白～淡褐色紋が存在した。また、両種蛹の形態的特徴は抜け殻でも保持され、識別に利用可能と考えられた。

青森県～熊本県のサクラ、ウンシュウミカン、クズで2種の発生状況を調べたところ、ハダニクロヒメテントウは、青森県～長崎県の広い範囲で発生が確認された。一方、キアシクロヒメテントウは静岡県以西で発生が確認された。また、両種が混発している事例も確認された。



図 ハダニクロヒメテントウ（左）とキアシクロヒメテントウ（右）の4齢幼虫